

初心に返ろう¹

とうとう本年を以て京大を辞職することになりました。これまで色々な面で私を支えて下さった方々に、厚く御礼申し上げたいと思います。私が京大に就職したのは昭和39(1964)年でありまして、34年間いた事になりますが、生協との関わりは比較的遅く、昭和60年前後のことであったと思います。事の起こりはある日当時教養部の英語の先生で居られた田中礼先生が、突然生協の副理事長をしてほしいと行ってこられたことでありました。聞けば先生御自身が当時副理事長でおられて、かつその時にアメリカに出張することになったという事でありました。生協については売店と喫茶と書籍部があるぐらいの知識しかなかった私は、到底任に堪えないと行って固辞しましたが、外に頼む人もないといわれるので、止むなくお引き受けした次第です。それには、誰かがしなければ学生の生活を援助することができないとすれば、やるしかないという気持ちがあったことも事実でした。

そこで、お引き受けした以上は、できるだけ生協について勉強しなければならないと思い、まず手始めにホリヨーク George Jacob Holyoake の *Self-Help by the People; History of the Rochdale Pioneers*. 邦訳『ロッチデールの先駆者達』(協会組合経営研究所訳)という本をコピーして戴いて読むことから始めました。その後手当たり次第に関係がありそうな本を乱読しましたが、初めて読んだせいでもあったのでしょうか、『ロッチデールの先駆者達』が、最も印象が深いものでありました。この書物は1884年の最初の協同組合「ロッチデール公正先駆者組合」The Rochdale Society of Equitable Pioneers の誕生から、1892年の「ロッチデール組合創立44周年記念祭」に至る期間を扱ったものであります。ホリヨークのこの著書は、協同組合が持つべき理念がどのようにして生まれ、どのようにして育まれてきたかを示す、極めて重要な労作として、今日でも決して古びてしまっていないと思います。

運動が盛んになり、またその内容が多岐に亘るようになって複雑なものになってくると、そこで語られる理念というものが、とかく見えにくくなってくるものだと思います。ところがこの書物に見えるいわば初期の、手探りの運動の記録においては、そのような理念の誕生が、しばしば極めて単純なものとして、目の前に立ち現れてくるものであります。その意味でやはり私たちは、絶えず原点に立ち返って事の本質を見失わないようにするためにも、草創の歴史を辿ることが、大切になるのではないかと、思っています。それで今日は、この書物から私が学んだことをいくつかお話ししてみたいと思う次第です。

ロッチデールはイギリスのランカシャー州の中心であり、産業革命に大きな役割を果たしたといわれるマンチェスターの北北東およそ18キロのところにある町であります。こ

¹これは1998年3月26日、京大会館において催された生協主催の送別会の席上で行ったものである。

のランカシャー州はリバプールという港を持っていたことから、織物の中心地として栄えました。それと同時に、ここでは織物に従事する貧しい織物工や、貧しい若年労働者を大量に生み出してもいました。彼らが組織した協同組合は、一口1ポンドの出資金を集め、「組合員の金銭的利益と家庭的状況の改善」をはかることを目的にするとうたっています。彼らはそのために食料品や衣類を売る店を作ること、多くの住宅を建設または購入して、劣悪な住居の問題を解決すること、失業した組合員に職を保証するために組合が決めた物品の生産を行うこと、実現が可能になり次第、生産、分配、教育および政治の力を蓄えることを目指すことを考えました。

彼らはこれらの目的のために、掛け売りをしないこと、即ち「現金主義」を実践しようとししました。ホリヨークは資金が極めて限られているために、しばしば仕入れに不利益を被ることもあったが、けっしてこの原則はそのような事情によるものではなく、道徳的な問題なのだ、と述べています。掛け売りによる借金は、劣悪な品質のものを買うことにつながるというだけでなく、初期資本主義のこの時代に、赤貧にあえぐ労働者の収奪の手段にもなっていました。その結果として労働者自身も労働の意欲を失い、刹那的なその日暮らしの中に埋没する傾向が社会的に存在していたと思われまます。「先駆者協同組合」がその活動の目的の中に「禁酒の普及のために、禁酒ホテルをできるだけすみやかに組合の建物の一つとして開く」ことをあげているのも、このような貧しい労働者に、出口のなさという、やりきれない気持ちに根ざすアルコールが、深刻な問題として存在していたことを物語っています。

いま、私たちは不況とはいいいながら、物質的には繁栄した社会に暮らしています。不況については私自身の経験からしても数多くありましたし、終戦の直後は食べるものにも事欠くひどい状態でありました。しかし現在は物質の問題ではなく、心の問題として、出口のなさという精神的な閉塞状態に関しては、当時の貧しい職工たちと余り変わりがないかも知れません。覚醒剤が蔓延し、自己破産が激増しているというのも、そのような社会的心理的状况が存在しているからに違いありません。

ロッチデールの組合はこれを「道徳的な問題」と捉え、「混ぜもののない品質、適正な量目、正直なものさし、公正な取り扱い、値切りのない買い物、掛け値のない販売」を目指しました。ホリヨークは「こうしたことは、教養のある人にとっては、道徳的にも、物質的にも、満足が得られる源であり、同じ品物が、よその店で少しばかり安いことよりも、はるかに大切なことである」(p. 52)と述べています。

しかしこのようなことが、自然発生的に起こるとしても、それは極めて稀な偶然であると考えられます。これが一般に受け入れられるようになるためには、組合員の教育が必要となってきます。もちろん教育といっても何も教科書風に理論を教えるということではありません。むしろそうすることには益よりも害の方が大きいでしょう。実感として学ぶことが必要だと思われまます。勿論自覚的に生協運動に携わる人々にとって、理論が極めて重要なことは明らかですが、..... ホリヨークもそう考えていたようです。彼は、「わが小さ

な協同組合は、大きな利益をあげることも、公益の道徳的改革を実現することを、より重要視した。この点で組合は、組合員や、利用者の人格の向上に、教育的な成果を上げた。当初、すべての組合員がこの点を理解していたわけではなく、彼らが組合を支持する度合いも、彼らの理解の程度によって異なっていた。信頼できる一部の組合員だけが、距離の遠近、値段の高低、品質の良否を問わず、それは義務であるとして組合を利用したのである」(p. 52)と述べています。

大学生協連の会長理事でおられました福武直先生は、「組合員をめぐる理想と現実」というところで、教育に関して次の3点を挙げておられます。

- (1) 組合員の現実、大学生協の理想と一般には大きくはなれている。

この現実を理想に近づけるために、組織部活動や委員総代の活動の重要性が生まれる。同時にその活動は、組合員意識が低いという現実から出発しなければならない。

- (2) 組合員の現実の要求に応えねばならぬが、同時にそれを望ましい要求に高めてゆく努力を困難ではあっても試み続けなければならない。

たとえば、組合員が偏食になるような食物を求めておれば、これにもこたえざるをえないが、同時に、それ故に一層「ちゃんと食べよう」という運動を強めるべきである。また安直なマンガを読む現実を無視できないが、「本を読もう」という運動はそれだけに一層大切である。

- (3) そして大学生協は、「生活」協同組合であるという原点に立ちかえって、この生活を基本におくべきである²。

先に引用したところで、ホリヨークが「品質の良否を問わず」と述べているのは気になりますが、これは初期の場合で、彼らが組合こそが自分たちの生活をやがて守るものになるという、確信を得ていたからでありましょう。現在協同組合が組合員の教育に力を注ぎ、また教育に費用を支出することが公に認められているのは、このような初心が貫かれているからだと思えます。

もう一つの問題は1849年にさかのぼります。1848年は大不況の年でありましたが、ロッヂデールの協同組合には次々と新規の組合員の加入が見られ、その規模が大きくなっていきました。組合員の急激な拡大に伴って「福音主義者であり、実際上の信教の自由の風に育てられなかった多数の組合員が登場した」(p. 63)のです。彼らは周囲の人々が彼らの信教の自由を認めているのに、そしてまさにそのことによって、彼らを組合員として受け入れたにも関わらず、彼ら自身は周囲の人々の思想信条の自由を認めず、日曜日には組合員室を閉鎖し、宗教上の論争を禁止することを要求したと述べています。ホリヨークは「自由主義の立場を説く堅実な協同組合人たちは……このような制限に全く反対であった。これ

²福武直『大学生協論』東京大学出版会 1985, p. 26.

らの協同組合人たちは、いかなる個人的利益にもまして、心の自由を重んずるがゆえに、不和を生む致命的原因を導き入れるこの動きに失望せざるを得なかった。この不和こそ、従来極めて多くの友愛組合を崩壊させ、更にまたお互いの向上についてきわめて有望な見込みがある場合にも、これを破壊し去ったものであった」(p. 63)と述べています。

この結果、1850年2月8日の総会において、「組合員は、適当な時期に、正当な手続きに基づいて会議に提出されたすべての議案に対し、自らの意見を述べる完全な自由を有するものである。また議案は正当に提出された場合においては、すべて正規のものとして取り扱われるものとする」という決議がなされたということです。またこれに先立つこと殆ど20年、1832年にロンドンで行われた第三回協同組合会議において、既に次のような決議がなされていたといえます。すなわち、

「協同の世界は、あらゆる宗派、あらゆる政党に属する種々の人びとを包含するものであり、協同組合人は、協同組合人たる資格においては、いかなる宗教的、非宗教的もしくは政治的な主義をとることも自由である。それがオーエン主義たると他のなんびとの教義たるとを問わない。ここに満場一致をもって、このことを決議する。」(p. 64)

日本の歴史の上でもそうですが、京都大学においても、これまでこの種の問題をめぐって、色々な危機があったと思われますし、また今後も起こってくることでしょう。私自身にも色々な体験をする機会がありました。そのような時には、ホリヨークが次のように締めくくっている言葉を思い出してほしいと思います。すなわち、

「わがロッチデールの協同組合が成就した道徳的奇跡とは、意見を異にするも調和を失わず、互いに異議を唱えるも分離せず、ときに憎しみ合うもつねに団結を守り抜く良識を持ち得たことである。」

私もまた心してこの言葉を覚えておくようにしたいと思っています。

もう一つの問題は、生協のシンボルとなっている虹の旗のことで、日本児童文芸家協会、日本児童ペンクラブに会員として所属しておられた三宅恵子氏が子ども向けに書かれた『ロッチデールの虹』という、感動的な物語があります(三宅恵子、伊藤展安絵『ロッチデールの虹』家の光協会 1975年、第5刷 1982年)。この中に虹のいわれが簡単に紹介されています。この方は神奈川県「さがみ生活協同組合」の理事長をしておられたことがあるとのことですが、あとがきによれば生協運動に献身し日本生協連の初代会長でもあった、賀川豊彦氏に触発されたとのことでありました。彼女もまた、やはりホリヨーク著の『ロッチデールの先駆者たち』にめぐり会ったのが生協運動に身を投じる直接の契機であったといえます。したがっておそらくはキリスト者であったと思われる、創世記の説明の方がはるかに長いのですが、その中に6行だけ、次のような記述があります。

「旧約聖書創世記に、ノアの箱船の物語があります。大洪水のあと、新しい平和な世界を求める人々の姿を、神が祝福して、空に虹をあらわされた、というものです。

フランスの経済学者シャルル・ジイド Charle Gide (1847-1932)³が、その“虹”を、協同組合のシンボルにしようと世界大会の席上で提案し、決定されたのです。

協同組合運動の中で、戦争反対を叫び、平和をもとめるのは、歴史的にみても、とげんのこととすることができます。」(pp. 116-117)

第一次世界大戦のあとの1924年、国際協同組合同盟の世界大会で、世界の平和と、協同組合の連帯を願って7月の第一土曜日を国際協同組合の日とすること、および協同組合の旗を虹の旗と定めることが決定されました。これは今述べましたように、旧約聖書の創世記にあるもので、ノアの洪水のあと、神がノアに述べたことに因んでいます。すなわち、

「あなたがたの命の血を流すものには、私は必ず報復するであろう…… 人の血を流すものは、人に血を流される、神が自分のかたちに人を造られたゆえに。あなたがたは、生めよ、ふえよ、地に群がり地の上にふえよ…… わたしはあなたがた及びあなたがたの後の子孫と契約を立てる…… わたしがあなたがたと立てるこの契約により、すべて肉なるものは、もはや洪水によって滅ぼされることはなく、また地を滅ぼす洪水は、再び起こらないであろう…… わたしは雲の中に、にじを置く。これがわたしと地との間の契約のしるしとなる。わたしが雲を地の上に起こすとき、にじは雲の中に現れる…… にじが雲の中に現れるとき、わたしはこれを見て、神が地上にあるすべての肉なるあらゆる生き物との間に立てた永遠の契約を思いおこすであろう。」(第9章5-16節)

私たちが安心して生活をするためには、戦争があつてはなりません。第一次世界大戦はヨーロッパが主戦場になり、激しい破壊を蒙りました。このことの反省が、虹をシンボルにしようという動きになったのだと思います。生活協同組合が生活を護るものであるとすれば、戦争に反対することは、当然であり、義務でもあります。それはどのようなイデオロギーとも関係のないことであります。逆に言えば、個人のイデオロギーをここに持ち込んでほならないということだと思います。特定のイデオロギーに偏ることなしに、戦争に反対することが、「政治」的な意味を持つとすれば、それは政治の方が間違っていることの証拠になると思います。この原点を守る限り、生協運動はどのような非難にも毅然と立ち向かうことができるだろうと考えています。私たちはこのことに自信を持つべきだと考えます。そのためには思想の自由と他の人々の思想の自由の尊重が厳しく守られねばなり

³フランスの経済学者。アンドレ・ジイドの祖父に当たる法学者ジャン・ポール・ギヨーム・ジイドの子である。ポルドー、モンペリエ、パリ大学の教授を経て1920年コレージュ・ド・フランスの教授。彼はフランス消費協同組合運動の理論的指導者であったが、その理論的立場は、労働価値説と限界効用説との折衷主義をとり、穏健な連帯主義的協同主義の立場に終始したという(『世界大百科事典』平凡社 1972)。

ません。こういう原点に立ち返り、それを護ることによって、生協運動が道を誤ることなく、今後ますます発展するであろうと思われまし、またそのことを期待しております。